

## 安成通信 2016/05/12 新しい鳥の目ードローン環境学への期待



今日午後、エリアケイパビリティープロジェクト主催でドローンを用いた観測のセミナーとデモが行われるようです。（私は東京出張が入ってしまい、大変残念ながら参加できませんが。）地球・地域環境学の進展には、環境を測るツールの発展が密接に関係しています。もちろん、環境学の基本は「人の目」による調査・観測です。直接、「環境問題」の現場に出かけて、自分の目で見て、聞いて、感じることの重要性は論を待たないところです。その「人の目」を補完して、問題をさらに俯瞰して多角的な情報を得るために、さまざまな「鳥の目」や「虫の目」で環境を見る、測ることも大切です。

地球環境問題の先駆けとなった「オゾンホール問題」も、日本などの観測隊による南極基地での直接観測に加え、NASAの衛星による、南極上空全体の「オゾンホール」のグローバルな可視化が決定的な役割を果たしました。人工衛星や航空機からのリモートセンシングの役割も地球環境学には大きい。しかし、このような「鳥の目」の欠点は、人や生きものの動きそのものが見えないことです。その点、ドローンは地上での人々や生きものそのものの動きも、定点観測、移動観測も含めて、捉えることができます。その利点のために、権力の立場の人には、諜報活動に使い使われる両刃の刃にもなり、ドローン規制の声も出ているわけですが、環境を測る、観る、診るという点でも今後大きな力にもなりうるわけです。

地球研には、同位体環境学、DNA環境学など、人の目では見えない「虫の目」にあたる環境ツールによる研究も進めてきましたが、新しい「鳥の目」としてのドローン環境学による研究の新たな展開も期待したいと思います。